

— 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

借景庭園として名高い奈良大和小泉の慈光院書院を訪ねる。緩やかな坂を上り表門を入り、松の木の切通し^{ききどし}、ほの暗いアプローチを左に右に折れながら上り中門を入ると、空がひらけ、茅葺き屋根^{かぶかき}の建物の前に到達する。玄關^{ぐわん}を入り、下の間四畳、中の間八畳を抜け、一番奥の上の間二畳に至ると視界が一気にひろがる。上の間の畳に座ると、軒先と刈込垣^{かりこぎがき}の二つの水平線の額縁で見切られた先に、東の山なみを背にした大和平野の風景をのぞむことができる。書院の上の間の座敷、その先の縁側や軒先、その先の刈込垣など、簡素なかに丁寧につくられた横長のフレームから見た、小高い丘の上からの大和平野の風景は、かつてはのどかなものであった。それは、大和路の写真家人江奎吉が写した写真であじわうことができる。

畳が敷き詰められた和室は、その座敷だけで成り立っているのではなく、縁側を介して、外の自然である庭とつながることにより、初めて成り立つ空間である。中から見える風景は、襖や障子を開け閉めすることにより、自在に調整することができる。慈光院書院は、そのよくなすぐれた特質を持つ和室である。借景とは、「庭の外にある景」を借りてきて、庭の景の構成要素の一つとして取りこむことである。借りてきた景は、敷地内の庭の景と重ねあわされる。「庭の外にある景」は、庭の景の主役にも、あるいは背景にもなりうる。借景の対象となる「庭の外にある景」は、もっとも一般的なものは、京都なら比叡山や東山、江戸なら富士山、筑波山などの山、琵琶湖のような湖沼や海の水面など、美しい自然景観である。一方で、京都の南禅寺泉涌^{せんじゆせんじゆ}なら南禅寺三門、あるいは奈良の依成園なら東大寺南大門のように、人間がつくった美しい建造物加わる場合もある。

借景ということが使われはじめたのは、一七世紀はじめの中国のことである。明の計成が著わした庭園書『園治』に借景が登場する。借景には、「遠借、隣借、仰借、俯借の区別があり、時にのぞみ景を借用する。」とある。遠借は遠くの景を借りることであり、隣借は近くの景を借りることである。仰借は仰ぎ見る景であり、俯借は俯瞰する景である。借景ということばは、一九世紀に日本に伝わった。借景がもっとも効果を上げるのは、遠くの景と近くの景を対比した遠借であり、著名な借景庭園は、遠くの景を引き寄せた庭が多い。

庭から見える景色の眺望がすぐれているだけでは借景とはならない。借景庭園にとって、庭から見える景色の眺望がすぐれていることは必要不可欠な条件であるが、それを借景として取りこむには、敷地内の庭の景ないし建築におけ

3 次のうち、本文中の①に入れるのに最も適していることばはどれか。一つ選び、記号を○で囲みなさい。

- A 変質してしまう イ 固定されてしまう
ウ 遠くの景である エ 美しい背景である

4 次のうち、本文中で述べられていることと内容の合わないものはどれか。一つ選び、記号を○で囲みなさい。

A 慈光院書院の上の間から見える、東の山なみを背にした大和平野の風景は、かつてはのどかなものであり、その様子は、大和路の写真家人江奎吉が写した写真であじわうことができる。

イ「庭の外にある景」は、庭の景の主役にも背景にもなることができ、借景の対象となる「庭の外にある景」は、一般的には美しい自然景観であるが、人間がつくった美しい建造物加わる場合もある。

ウ 明の計成が著わした庭園書『園治』によると、借景には、遠借、隣借、仰借、俯借の区別があり、仰借によって遠くの景と近くの景を対比すること、慈光院書院は有名な借景庭園となった。

エ 慈光院書院からのぞむことのできた、のどかな大和平野の風景は、都市化の波により失われたが、慈光院書院の庭園は「見切り」方を考え「借り」方を工夫することで、今の時代とともに生きている借景庭園となっている。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

臣下あまた聞こえし中に、治部卿定家、宮内卿家隆とて、家の風絶ゆる事なく、その道に名を得たりし人々なりしかば、この二人にはいづれも及ばざりけるに、ある時、摂政殿、宮内卿を召して、「当時正しき歌よ多く聞こゆる中に、いづれかすぐれ侍る。心に思はんやう、ありのままに」と御尋ねありければ、「いづれともわきがたく候」とばかり申して、思ふやうありげなるを、「いかにいかに」とあながちに問はせ給ひければ、ふところより畳紙を落として、やがて出でにけり。御覽せられければ、

明けば又秋のなかも過ぎぬべしかたぶく月の惜しきのみかはと書きたり。この歌は治部卿の歌なり。かかる御尋ねあるべしとはい

る作爲が必要とされる。もっとも一般的な作爲は「見切り」であり、「庭の外にある景」の必要な部分を選びだす。写真におけるトリミングと考えるとわかりやすい。すぐれた眺望は、長方形の画面に切り取ることににより写真となる。敷地内の庭の景の近景、そして少し離れた中景をつくりこみ、見たい部分だけを選びだし遠景を取りこむことにより、すぐれた眺望は借景となる。庭の主役ではなく背景となる場合もある。たとえば京都の円通寺庭園では、樹々の間に垣間見える比叡山を借景としている。「庭の外にある景」は、杉木立の樹々の奥にひかえ、庭の景の、美しい背景となっている。

借景は、「庭の外にある景」を借りている。借りている対象となっている山水面、建造物は、敷地の外にあるものであり、手を加えることはできない。それゆえ、借りている対象が①と借景にはならない。また、借りている対象と敷地内の庭の間に、都市化とともに建物が建ち視線が妨げられれば、もはや遠くの景を借りることはできない。京都大徳寺本坊方丈の東庭は、比叡山をのぞむことはできなくなり、借景庭園であった姿は「都林泉名勝図会」の絵の上で想像できるだけである。

慈光院書院からのぞむことのできた、のどかな大和平野の風景は、昭和の高度成長期、都市化の波により失われ、それをなげく人も多くいた。その後平成に入ると、先代住職により、丘のふもとの蓮池のまわりに植樹することが始められた。都市化された庭にそぐわない風景をかくす努力が重ねられるなか、樹々は二十数年かけて育ち、中景は整えられてきた。かつて見ることできた風景と同じではないが、令和の日本において「見切り」方を考え「借り」方を工夫することで、慈光院書院は、今の時代とともに生きている借景庭園となっている。

(上西明「借りる」による)

(注) 切通し 山や丘などを切り開いて通した通路。

アプローチ 敷地の入り口から玄関までの間の通路。

茅葺き屋根 ススキなどの草で覆われた屋根。

トリミング 不要な部分を取り除いて画面を整えること。

1 本文中のA・Dの——を付けた熟語のうち、熟語の構成が他と異なるものが一つだけある。その記号を○で囲みなさい。

2 本文中で筆者は、借景庭園が成立するためにはどのようなことが必要であると述べているか。本文中のことばを使って四十字以上、五十字以内で書きなさい。

かでか知るべき。ただ、もとよりおもしろくおぼえて、書き付けて、持たれけるなめり。

その後、又治部卿を召して、さきのやうに尋ねらるるに、これも申しやりたるかたなくて、

かささぎのわたすやいづこ夕霜の雲井に白きみねのかけはし

と、たかやかながめて出でぬ。これは宮内卿の歌なりけり。

まめやかか上手の心は、されば一つなりけるにや。

(注) 摂政 天皇に代わって政治を行つた人のこと。
畳紙 歌などを書くのに用いる紙。

1 次のうち、本文中の——を付けたA・Dの動作を行っている人物として最も適しているものはそれぞれどれか。一つずつ選び、それぞれ記号を○で囲みなさい。なお、同じ記号を何度選んでもよい。

- A 治部卿定家 イ 宮内卿家隆 ウ 摂政

2 ①かかる御尋ねとあるが、次のうち、このことばがさしている内容として最も適しているものを一つ選び、記号を○で囲みなさい。

- A すぐれた歌はどのようによめばよいのかということ。
イ 現在の歌人の中では誰がすぐれているのかということ。
ウ 定家と家隆は本当にすぐれた歌人であるのかということ。
エ 昔の人の歌はどのようなところがすぐれているのかということ。

3 まめやかか上手の心は、されば一つなりけるにやとあるが、本文中で筆者がこのように述べる理由を次のようにまとめた。□に入る内容を本文中から読み取って、現代のことばで二十字以上、三十字以内で書きなさい。

摂政の質問に対して、家隆と定家がそれぞれ、□から。

三 次の問いに答えなさい。

1 次の(1)～(3)の文中の傍線を付けた漢字の読み方を書きなさい。また、(4)～(6)の文中の傍線を付けたカタカナを漢字になおし、解答欄の枠内に書きなさい。ただし、漢字は楷書で、大きくていねいに書くこと。

- (1) 損失を補填する。
(2) 朗らかに笑う。
(3) 凡庸な作品。
(4) オンコ知新の精神。
(5) 争いのチャウサイに入る。
(6) 金メダルがシャチャイ圏内に入った。

2 次のア～エのうち、頭語と結語の組み合わせとして適切なものを二つ選び、記号を○で囲みなさい。

- ア 拝啓―敬具 イ 拝啓―草々 ウ 前略―敬具 エ 前略―草々

四 次は、科学者である筆者による文章である。これを読んで、あとの問いに答えなさい。

人生の最も大きな喜びの一つは、年来の希望が実現した時、長年の努力が実を結んだ時に^A得られる。私のような研究者にとっては、長い間、心の中で暖めていた着想・構想が、一つの具体的な理論体系の形にまとまったとき、そしてそれから出てくる結論が実験によって確証されたときに、最も大きな生きがいを感じられる。しかし、そういう瞬間は、私たちの長い研究生生活の間に、ごくまれにしか訪れない。私たちの人生のほとんど全部は、同じようなことの繰返し、同じ平面上でのゆきつもとどりつのために費やされてしまう。日々の努力によって、相対前進したつもりになっていても、^Bふりかえってみると、結局同じ平面上の少し^C離れたところにくいているに過ぎないことを、あまりにもしばしば発見する。一つの段階からもう一つ上の段階に飛びあがれるのは、それ

て苦心をしつづけていたかも知れない。その「何か」が重要なことであったかも知れない。「どんなふうに」苦心したかが重要であつたかも知れない。

絵をかく人は、絵になる以前のイメージを自分の中で暖めて育ててきたであろう。彫刻家は素材を前にして、まだ現実化されていない理想的な形態を思い浮べているであろう。科学者の研究が一応完結するまでに、一篇の論文となるまでに、どんなに長い間、生みの苦しみをしつづけてきたのか。ついに絵にならない場合、ついに彫刻が完成しない場合、論文が出版されない場合、それがどんなに多いか。外から離れて見る者にはわからない。いわばそれは具象以前の世界である。混沌から、ある明確な形態をもった物が生れるより以前の世界、生れようとしている世界である。その人自身にとって、また深い関心をもって、その人の世界を知ろうとする人にとって、それは無意味な世界ではない。

科学文明の発達の結果として、情報伝達の方法が急激に変化してきた。新聞・ラジオ・テレビ等を通じて、私たちに与えられる情報が、ますます重要となり、私たちに圧倒的な影響を及ぼすようになってきた。それは一方では、遠く離れたところで起った出来事、自分と直接関係のない人々を、身近に感じさせる作用を持っている。他方ではしかし、情報を受けとる個人の特殊性を越えて、あらかじめ選択された情報を万人に同じように与える作用も持っている。それはずでに具象化されたものの中からの選択である。具象以前の世界は初めから問題になっていない。

情報伝達だけではない。人間の頭脳の機能の一部までも機械が受けてくれるようになってきた。しかし、そういう機械もまた、すでに具象化された知識を適当な記号の形に変えた時だけに質問として受入れてくれるのである。そしてその機械が与えてくれる答えもまた、具象化された知識に関するものだけである。人間は具象以前の世界を内蔵している。そしてそこから何か具象化されたものを取出そうとする。科学も芸術もそういう努力のあらわれである。

(湯川秀樹『湯川秀樹集』による)

(注) 苦心さんたん＝非常に苦心すること。

1 本文中のA～Dの――を付けた語のうち、一つだけ他と活用の種類の異なるものがある。その記号を○で囲みなさい。

こそ天の羽衣がきてなでるほどに、まれなことである。

それなら人生の大半は、小さくいえばその人の個人としての進歩・飛躍、大きくいえば人類の進歩・飛躍とは無関係な、エネルギーの消費に終始しているであろうか。決してそうではないように思われる。むしろムダに終ってしまつたように見える努力の繰返しの方が、たまにしか訪れない決定的瞬間より、ずっと深い大きな意味を持つ場合があるのではないか。ずっと若いころの私は「百日の労苦は一日の成功のためにある」という考えに傾いていた。近年の私の考え方は、年とともにそれは反対の方向に傾いてきた。それに伴って、真理の探求の道を歩いた多くの科学者に対する私の評価も、昔と今とで大分違ってきた。

ある科学者が画期的な発見をするとか、基本的に新しい着想から出発したある学説を提唱するとかした場合、私たちはもちろん、その学者を高く評価する。一言にしていえば、科学者をその業績によって評価する、それは確かに公正な態度である。どんなにその学者が苦心さんたんしたにせよ、そこから独創的な業績が生れなかつたら、多くの場合、私たちはその人の価値を認める正当な理由を持ち得ないであろう。それはそうに違いない。しかし同時にそれは、外から見た時の、やや離れて見た時の評価でもある。

ところで、私たちは自分以外の学者の大多数が、どういう苦勞をしているか、何に苦勞をしているかを知らない。自分の身近の少数の学者について、あるいは遠くにいる学者がある大きな成功を収めた場合についてだけ、それらの人々の苦心を知らされたり、関心を持ったりするのである。一人の人間の能力はきわめて限られている。自分以外の多数の人たちの苦勞に一々関心を持っていたのでは、自分自身が失われてしまうであろう。それもその通りである。

しかし、それにもかかわらず、私は近來、外から見て、離れて見て、ある人の評価をするだけではないということをも、ますます強く感じるようになってきた。ある人が何のために努力しているか、何を苦勞しているかという面をも、もっと重要視しなければならないと思うようになってきた。

天の羽衣がきてなでるという幸運は滅多にこない。一度もそういう幸運に恵まれずに一生を終る人の方がずっと多いであろう。しかし、だからといって、そういう人の人生は無意味であつたとは限らない。他人は知らなくても、その人自身は何かについ

2 天の羽衣がきてなでるという幸運は滅多にこないとあるが、本文において、このことばがどのようなことを表しているかを次のようにまとめた。

に入れるのに最も適しているひとつづきのことばを、本文中から八字で抜き出しなさい。
--

私たちの人生の中で、大きな成功を収めることは

--

 ということ。

3 次のうち、科学文明が発達した結果起こったことについて、本文中で述べられていることがらと内容の合うものはどれか。最も適しているものを一つ選び、記号を○で囲みなさい。

ア 情報伝達の方法の急激な変化により、新聞・ラジオ・テレビ等を通じて与えられる具象以前の世界の情報が、私たちにとってますます重要で影響を強く及ぼすものとなった。

イ 急激に変化した情報伝達の方法は、遠く離れたところで起った出来事に関する情報を万人に同じように与えるため、私たちは情報を受けとる個人の特殊性を身近に感じるようになった。

ウ 人間の頭脳の機能の一部を受けもつようになった機械が受入れてくれる質問や与えてくれる答えは、すべてがすでに具象化された知識に関するものである。

エ 機械が人間の頭脳の機能の一部をになうようになると、すでに具象化されたものの中から選択された情報だけでなく、具象以前の世界も問題視されるようになった。

4 科学も芸術もそういう努力のあらわれである とあるが、本文中で筆者は、具象化されたものを取り出そうとする努力とは、科学者と芸術家それぞれにとって、どのようなことであると述べているか。その内容についてまとめた次の文の

--

 に入る内容を、本文中のことばを使って九十文字以上、百五文字以内で書きなさい。

具象化されたものを取り出そうとする努力とは、科学者にとっては、長い間、心の中で暖めていた

--

 ことである。

五 文学作品を読むことの意義についてのあなたの考えを、別の原稿用紙に三百字以内で書きなさい。

得点	
----	--

$\frac{1}{13}$	4	2	2	2	1	1	1	探点
----------------	---	---	---	---	---	---	---	----

受験 番号	番
----------	---

得点	20
----	----

- ・原稿用紙の正しい使い方にしたがって書くこと。
- ・題名や名前は書かないで、本文から書き始めること。

采点	20
----	----

[illegible]